

震災から7年、女川は今

科学ジャーナリスト 東嶋 和子氏

【略歴】1985年筑波大学比較文化学類卒業（在学中、米国カンザス大学へ文部省交換留学）、読売新聞入社。本社科学部記者等を経て1991年退社後、フリーランス・ジャーナリストとして科学分野を中心に取材・執筆。「いのち」をキーワードに、科学と社会の関わりを迫っている。筑波大学非常勤講師、青山学院大学非常勤講師

【著書】「水も過ぎれば毒になる 新・養生訓」「人体再生に挑む」「死因事典」「放射線利用の基礎知識」等多数。外務省外交フォーラム外務大臣賞、日本原子力学会優秀活動賞受賞



はじめに

2011年3月11日の東日本大震災以来私は、被災地を歩き、震災の爪痕を見てきました。東北電力女川原子力発電所は、大きな揺れと津波を受けながら安全に停止し、3か月間、最大364人も住民を受け入れました。その記録を、「そのとき女川は」と題し報告しました（2013年12月発行「ひろば」431号）。

震災から7年が経った2018年4月、私は再び女川を訪ねました。出会ったのは、発電所の安全を守り抜いた人々、発電所をさらに強固にすべく工事や訓練に勤しむ人々、「復幸」へ歩き続ける人々でした。

それぞれの体験を振り返り、語っていただくことで、女川の安全への取り組みの「成功」の理由や街づくりのヒントが生き生きと立ち上がってきました。

資料1 女川原子力発電所の概要



佐藤敏秀さん(東北エネルギー懇談会会長、元東北発電工業女川支社長)

【信頼こそが大きな原動力だった】

佐藤会長は震災時、東北発電工業女川支社の支社長を務めていました。女川原子力発電所内では関連会社の方も含め約300人ほど働いていました(発電所全体では1,600人)。当時の対応や現在の課題等について話していただきました。

◇大震災直後

大震災当日は1・3号機は通常運転中、2号機は14時に原子炉を起動したばかりのタイミングでしたが全機が設計どおりに自動停止しました。地震加速度は、福島第一の550ガルより強い567.5ガルで、かつ、半島全体が1メートル地盤沈下するという激しいものでした。

東北発電工業は、機械や電気設備のメンテナンスや水の浄化設備の運転等を担当しており、地震直後は、1号機のタービン建屋での火災や2号機への海水流入がありました。余震や津波の恐怖と闘いながら、東北電力社員と消火活動、ポンプによる海水くみ上げ、そして土嚢積みを行ったといえます。

佐藤会長は、地震発生時には東北発電工業の本社(仙台市)で会議をしていたようですが、直後の電話で「支社の事務所内はめっちゃめっちゃだけど、発電所は大丈夫だ」と確認できました。また、緊急時の体制が機能し、道路が寸断されている中、物資を途中まで運び発電所までは背負って運んだり、軽油やガソリンは新潟、秋田、東通、東京などからかき集めるなど、機動力を発揮したそうです。

道路が通じた3月16日に食料や医薬品を会社のライトバンに積んで女川に向かったが、会社の寮を見に行く途中の見慣れた集落が、建物の土台、そして表土がすっかり剥ぎ取られていました(写真①)。SFのようなその荒涼とした風景に、津波の恐ろしさと感じたといえます。

飲料水は、約40キロ離れた北上川から供給していたのですが、導水管が破損したため土木建築課が修理作業をしていました。

しかし余震等で直しても直しても直ぐ穴が開いてしまう中で、「俺たち東北発電工業ががんばらなければ誰がやるんだ」という強い使命感から辛抱強く作業を続けました。このマイプラント意識は、東北電力との信頼関係があったからだと言います。



▲東北エネルギー懇談会にて佐藤敏秀会長(左)と筆者



▲写真① 鮫浦地区の状況

◇今後の課題

震災から7年、東北電力の原子力発電所は一基も動いていませんが、今後はどうやって人材を確保し、技術を継承していくのか、大きな問題になっています。将来世代にエネルギーをきちんと残すには、原子力や再生可能エネルギーを使ってエネルギー自給率を上げていくことが必要ですと佐藤会長。

地球温暖化対策には、温室効果ガスを出さない電源を有効活用すること、そして事故が起きた時こそ、たじろがず検証して徹底的に安全を高める気概が必要だと、お話いただきました。

阿部剛さん、児玉強さん、須田明宏さん(東北発電工業女川支社)

【常に現場が我々の仕事場】

東北発電工業女川支社で震災当時、発電所を駆けずり回って安全を守り抜いた同社工事部の阿部剛工事部長(当時女川支社工事管理課主査)、小玉強専任課長(同工事一課副課長)、須田明宏品質管理課長(同工事二課チーフリーダー)に、当時の対応や現在の思いを伺いました。3人とも20年以上女川で働くベテランです。

◇大震災直後の現場

地震直後に、保修センターの照明は消え、書類などが散乱したものの、事前の地震対策のおかげでロッカーが倒れたりすることはありませんでした。余震が続く中、東北電力から火災や海水流入への対応要請がひっきりなしに入ります。

当時、阿部さんは工事管理課という工事部門の取りまとめの部署にいたので、社員の就寝場所の確保、安否確認、駐車場の



▲東北発電工業にて左から須田さん、阿部さん、小玉さん、筆者

確保、通勤バスのルート決めなどの後方支援を行っていました。希望して女川勤務となった彼にとって「1号機は友達、2号機は子供、3号機は孫、どれも可愛い」といいます。

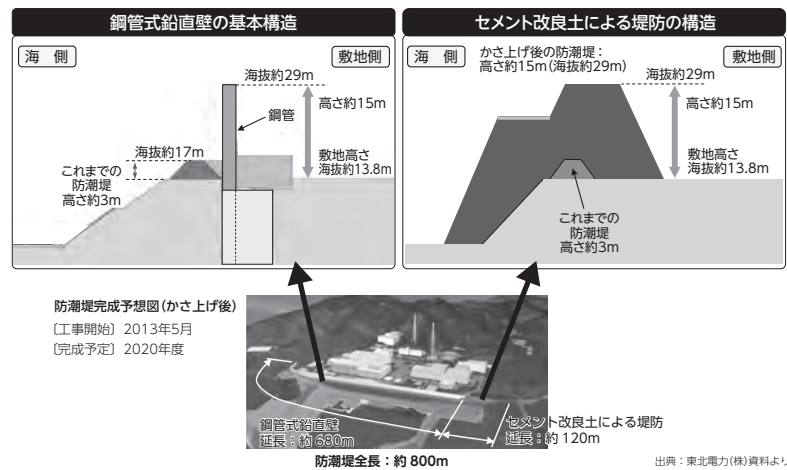
16時頃に1号機タービン建屋で火災が発生しました。機械系の部署にいた須田さんは、東北電力の要請に応じて、状況を想定して送風機等の機材をかき集めて現場に向かいました。ひどい臭いと凄まじい黒煙の中、全面マスクを着用して煙を排出しました。これが一段落し、夕食をとっていたら、直後に今度は2号機の熱交換器室での浸水により「水をかき出してくれ!」との要請がありました。津波の被害により十分な機材を確保できなかったですが、水中ポンプの能力を考慮し、ポリ容器で一旦途中の階で中継しながら排水をする等、臨機応変な対応ができたそうです。

また、電気関係の取り纏め業務を行っていた小玉さんは、様々なところからの「照明を活かしてくれ!」という声に対し、仮設の分電盤で接続したり、エンジン発電機を動かしたりして対応しました。普段から危険予知訓練をやっているため、非常時の指揮命令系統ははっきりし

ており、震災時もスムーズに機能していたといえます。

社員の方々はみな家族のことを心配しつつも、落ち着いて自分の役割を果たしていたそうです。彼も、希望しての女川勤務で、最近では、新入社員に対し「わからないことは後回しにせず、必ず聞くこと」と口を酸っぱくして教えている、と話してくれました。

資料2 女川原子力発電所 津波侵入防止対策



◇今後に向けて

震災から7年を経て、「2号機の再稼働に向けて全力で取り組んでいきたい」と3人は話します。須田さんは「2号機の再稼働に向けて、東北電力や協力会社と協力・議論をしながら、コミュニケーションをしっかりとって前進していきたいと思います」、阿部さんは「自分たちがしっかり仕事することで原子力に対する理解を深めていただけたらありがたいです。そのためには信頼してもらえない仕事をしないといけないと思います。地球温暖化防止などを考えれば原子力しかないと思います」、小玉さんは「地域の人に認められ信頼してもらえない仕事をするだけだと思います」とそれぞれ語っていただきました。

安住信也さん、阿部さきさん、阿部美和子さん、鈴木舞さん、平塚千尋さん (東北電力女川原子力PRセンター)

【PRセンターから発電所や女川の情報発信】

東北電力女川原子力PRセンターで来訪者への説明を担うアテンダントの女性スタッフ。10人全員が地元出身で、自宅が被災したり、中には肉親が行方不明になったスタッフもいます。震災時の対応と発電所PRセンターの思いを伺いました。

◇大震災直後

震災当日、仙台市内の大学生ら17人を発電所へ案内している最中に地震に見舞われたため、避難者と一緒に発電所で過ごしましたが、その間、外部と連絡が取れず、保護者の方に大変ご心配をおかけしました、と振り返っていました。

PRセンターは天井材が落ち、展示物のガラスも割れたが、津波襲来後に、石巻市鮫浦地区の阿部正夫区長(当時)をはじめ大勢の近隣住民が助けを求めてPRセンターに避難されました。

◇懸命の対応

照明も暖房もありませんでしたが、スタッフはセンター所長の添川信夫広報課課長(当時)と共に濡れた人の着替えやケガの対応にあたりました。

その後発電所へ誘導し、22時頃に温めたレスキュー食を提供したそうです。さらに夜が明けてからも「地元に残っている人を連れて来たい」という声が多く、発電所からバスを出して迎えに行きました。

また、憔悴しきった避難者の中でも水に浸かりながら歩いてきたという妊婦の方が大変不安な様子だったので毛布を渡し、未着用の作業着を渡したそうです。

自分の家族の安否も分からないまま、対応に励んだスタッフたちでしたが、ショックで気が動転し、避難者の名簿作成の名前を書く時に手が震えてつらかったと話していました。その後、最大364名の避難者を受け入れ、約3か月間の避難生活を献身的に支えました。



▲左から鈴木舞さん、阿部さきさん、筆者、平塚千尋さん、阿部美和子さん



▲東日本大震災後に地域住民を受け入れた女川原子力発電所内の体育館

阿部喜英さん(有限会社梅丸新聞店代表取締役、女川町観光協会会長)

【やりたいことを持つ人が自由に行き来し、ゆるやかにつながる女川へ】

震災後、復興のシンボルとして建てられたウミネコが羽ばたくようなJR女川駅や、赤色のレンガが敷き詰められた駅前広場など、女川の町は一変しました。地元で代々新聞店を経営する阿部喜英さんに伺いました。

◇女川町の復興が進展

震災で自宅と店舗を流されましたが、幸い家族が全員無事で、また両親宅は床下浸水したものの生活はできたため、震災から3日後に仕事を再開しました。

避難所で壁新聞を食い入るように見ている人たちを見て、「このエリアに新聞を持ってこられるのは自分しかない」と思ったことがきっかけだったそうです。

町内の全避難所を回って、“人間伝書鳩”になって、人と情報をつないでいきました。そうしたこともあり、「復興連絡協議会」に誘われ、まちづくり創造委員会の委員長として若手の方々と意見交換をしました。

まずは仮設店舗を早く持ちたいという声に「コンテナ村商店街」を7月1日に開設。2012年3月には第1回「復幸祭」を開催しました。被災した人が幸せを取り戻したと思った時が復興だと考え、「幸」という字を当てたということでした。

同年9月には「復幸まちづくり女川合同会社」を立ち上げ、女川水産業体験館の「あがいんステーション」を建設し、持続可能な町を目指しました。さらに女



▲「ハマテラス」内の海鮮・水産加工品販売コーナーにて阿部さん(左)と筆者

川駅前商業エリアのマネジメントをする「女川みらい創造」という会社も設立。こうした流れの中で、公と民の役割分担を考えながら事業を進める体制ができたそうです。

このような活動によって、震災前よりも観光客数は増えていると思うと阿部さんは語ります。震災前にはなかった企業の研修や視察のニーズも多く、女川を訪れた人に対してまちづくりの経緯についてお話しているそうです。今の持続可能な町の仕組みを維持し、変化させ続けるための新たな組織づくりが今後の課題だと話します。

女川には、移住して来られる方も少ないながらも、「新しい人たちが入ってくると、新しい刺激ができて化学反応が起きます」と阿部さん。ここに来れば何かできる、挑戦する土壌がある、周りの協力体制がある、とよく言われるそうです。

◇原子力発電所への思い

阿部さんは女川原子力発電所に対しては、発電所がないと困ると考えているそうです。福島事故を考えると、将来的には転換も必要かと思うのですが、代替できるものがない中で、日本の経済、女川の町を考えたときに、やはり必要不可欠な施設、としています。今後は、発電所を見学する団体客に女川の視察と食事をあわせる企画も予定しているそうです。



▲「シーバルピア女川」のレンガみちにて阿部さん(右)と筆者

最後にしがらみにとらわれず、やりたいことのある人が自由に行き来して関わりを持ち、ゆるやかにつながればいいと思っています。二度三度と女川を訪れてくれる『関係人口』を増やせばいいですねと語っていただきました。

文責:当懇談会<「ひろば」489号を当懇談会にて要約・改編>